

NEWS LETTER



株式会社人財アジア 定期ニュースレター

vol.20

☐ 岡村の最近の注目ニュース ☐ ビジネス予備校近況リポート ☐ B-EAT 会活動報告 ☐ What's up?

2022年03月

2022/03

いつ始めても
遅すぎることはない。

3～4月は EAT ビジネス予備校の卒業シーズン。

社員も私も一年間ともに走ってきた生徒の皆さん一人一人の顔を思い浮かべて感傷的になる。今期は、コロナやウクライナ侵攻など世の中の不安定さが増大している中での協学ゆえ、より心に刻まれる時間となった。世代や業種を越えて本音で議論し合う濃密な一年は、(我々主催者も含めて) 各自の今後の人生に相応のインパクトを持って影響を及ぼすだろう。

ビジネスにおける“理と情の関係”をいかに捉えるか

記念すべき節目となる卒業だが、あえて「中締め」と称して、自身の感情が高ぶらないよう気を付けている。

人生100年時代、学びの効果が長く続く「仕組み」作りの冷静な応援こそが、大事な生徒への思いの表し方と考えるからだ。弊社顧問の麻植茂氏に「ビジネスは100%理である」との言葉を貰ってから10年近く経つが、いまだにその真の意味を反芻、模索し続けている。奥が深い。皆さんは、自身を人間的という曖昧な言葉で肯定し、感情に身を任せて判断や行動をしていないか？身の回りにイエスマンが増えてきたと感じたら要注意だ。

気を緩めれば情緒に流されやすい私は、自己を客観視する仕組みとして以下を大切にしている。

①本音で語り合える関係を構築する。

「それ、納得できません」「前の指示とちょっと違いますか？」そんな本音を部下や後輩が言ってくれるようになったら、あなたの成功はほぼ確実だろう。部下こそ最高のメンターだ。中には考えがすぐまとまらない人もいる。ならば「うまく言葉が出てこないけれど、なんかおかしく感じる・・・」と“心の実況中継”をしてもらうだけでよい。進言の受け手が心を乱しさえしなければ、本音の発信は、言う側も言われる側も幸せにする。

②様々な目線を持つ。

予備校で資産運用を模擬的に経験したみなさんは、今回のウクライナ侵攻を“自分事化”しながら追いかけていることだろう。同じニュースでも、誰もがプーチンになりかねないと思って読むか、他人事として突き放して読むかで、学びの深さが全く違うことを実感しているはずだ。世界目線を獲得すれば自身を客観視する最高のツールとなる。身近な例をとれば、上司目線で自身の業績を評価すると、自己の過大または過小評価が抑制されることだろう。

4月から新年度を迎える人が大半だと思うが、新しい職場や立場になって心が躍る人もいるだろう。1週間もしたら一步下がって冷静に自己を客観視してみたらどうか。ビジネスにおける“理と情の関係”をいかに捉えるか、いずれ是非みなさんの考えを伺ってみたい。今回のご寄稿くださった藤岡さんからは、強烈な言葉の選択の背景に次世代への深い愛情を感じる。叱咤激励と受け止めて私もわが身に鞭を打っている。

私が『保身 積水ハウス、クーデターの深層』を書いたワケ

日本企業は、倫理を取り戻せ！

元講談社『週刊現代』記者
フリージャーナリスト
藤岡 雅 氏



皆さんは地面師事件を覚えているでしょうか。
2018年に明らかになった巨額詐欺事件です。あの積水ハウスを手玉に取った狡猾な地面師像が定着しましたが、実態は全く違いました。
それは、古臭い手法の陳腐な詐欺であり、素人ならまだしも不動産のプロが騙されるはずのない事件でした。内通者の存在が当初から疑われており、積水ハウス社内で大変な腐敗が起こっていると思えなかった。案の定、地面師事件の全容解明を巡り内紛が勃発。地面師との

取引を指示した社長が、社内の腐敗を一掃しようとする実力会長をクーデターで追い落としたのです。
私はクーデターの顛末を『保身 積水ハウス、クーデターの深層』にまとめました。積水ハウスの取締役会で起こった社内抗争を通して、いかにサラリーマン経営者が小物になっていったのかを描きました。公益心を失い、保身のためにウソを繰り返し、会社のダメージも顧みない経営者の姿は、日本企業で広がる「倫理の漂流」の象徴だったのです。
陳腐な詐欺に騙されたのは、能力のない経営者の指示を、現場のイエスマンたちが詐欺を疑いながらも執行した結果でもあります。トップの指示には疑問を差しはさまない、反論もしない――。巨大組織にありがちなワナでした。保身の塊のような人がトップに就き、その指示に現場は保身で答えるしかないという悪夢のスパイラル。自分がそんな組織に身を置いてしまったら、どう行動するべきでしょうか。倫理を顧みることができかどうか、判断の分かれ目となるはずです。フリーランスの私は、組織の不文律を本当の意味で理解していませんので、倫理を優先できない日本のサラリーマンを「保身クズ野郎」などと呼んでしまいます。しかし、トップに一人で抗うことが難しいことも知っています。

だからこそ、組織は保身のトップを作らないための制度改革が必要です。その一つが本書の中で一貫して支持しているコーポレートガバナンスであり、スチュワードシップコードを重視したステークホルダー資本主義です。ところが日本ではマスコミも含めて、このシステムを理解している人はほとんどいません。経団連の中にはこの仕組みを否定する人さえいます。コーポレートガバナンスの本質は、いかなる時も会社を私物化させないシステムです。これらの仕組みは資本主義を正常に運営するため、極めて重要なシステムでありながら、日本では疎んじられている。ここに日本の組織が保身のトップを生み出す、根本的な原因があると思います。
実は、この問題の本質に積水ハウスの社外役員で構成する調査対策委員会は気づいていました。調査報告書で地面師事件の責任者である社長を「解任するべき」と答申していましたが、結果は逆になりました。本質的な問題に向き合えなかったことで、積水ハウスは今後、同じ過ちを繰り返すことになるでしょう。
なぜなら、東芝、東電、関電、オリックスなど過去何度も繰り返されてきた企業不祥事は、実は本質的な問題に向き合えなかったことが原因だったからです。この結論は『保身』を書きあげた私の確信でもあるのです。

こうした改革は私たちの世代に託された課題でもあると思います。心あるビジネスパーソンが少しでも増えて、次世代のために地道な改革を進められることを望んでいます。

B-EAT ビジネス予備校のOB/OGによる地域を超えた繋がり

IMF 日本 代表理事 田中琢二氏（財務省）をお招きしたネット対談を開催。



人財アジア主催のネット対談「不確実性が増大する世界でいかに生きるか～日本人の底力」を実施。

予備校卒業生他40数名が参加。質問が絶えず。空海の三密加持他から紐解き、日本の名経営者の理念と成功の必然を語る講演から、日本人の底力を感じ、大いに勇気づけられた。

What's up?



原 英明
HIDEAKI HARA

EAT ビジネス予備校
福岡クラス（3期生）
某生命保険会社勤務

コロナ禍の在宅勤務にも慣れました。リモート環境では曖昧さを減らし、明確な成果物を大切にしています。しかし、それだけでは組織運営は難しく、絵と言葉の両方で伝える等、コミュニケーション上の工夫をしています。EATでは、一流の方々と自分の差を知りました。

卒業後、進む方向や距離は分かりましたが、日々進む距離は自分で決めることなくはありません。共に学んだ方々との縁を推進力とすべく大切にしていきたいです。